

<櫻田會通信>

ポーランド便り②「日本熱・日本語熱」

大東文化大学法学部
政治学科教授
武田 知己

私の初めてのワルシャワ生活の導き手となってきているのは、友人のカタジナ・スタレツカ先生である。日本の戦後史の研究者で、私とも研究領域や関心が近く、いつもいろいろと相談に乗って貰っている。日本語の達人で、上皇様ご夫妻がワルシャワ大学をご訪問された際の通訳もされた。

一度彼女の提案で「福島と沖縄」を題材にワルシャワ大学の日本学科の学生



向けに講義をした(写真は講義する筆者、2023年6月。スタレツカ先生撮影)。何人かの学生はその後私の事を覚えていてくれて、キャンパスで会うと話しかけてくれたりする。中でも彼女の教え子たちは、私をみると日本語で話しかけてくれるし、ちゃんと日本式のお辞儀してくれる学生もいるので感心する。また、私の友人がワルシャワを經由してアウシュビッツ・ビルケナウを見学した際も、学生が、労を厭わずアテンドしてくれた。優しく真面目で働き者という感じの好感を持てる学生が多い。日本人がポーランド人に強い親近感をもつ大きな理由はこれであろう。

また、ワルシャワでは、二度ほど日本語を学ぶポーランド人の集まりに顔を出した事がある。学生もいれば、そうではない普通の人もある集まりで、世代も20代から60代くらいまでと幅広い。こういった経験から、何故日本や日本語への強い関心が生まれているのかを考えると、いくつか頭に浮かぶことがある。

一つは、歴史的な経緯である。何よりもポーランドは、日本がかつて戦争でロシアに勝ったことを知っている。それだけで日本に親近感を持つ人が少なくない。これは、ウクライナ戦争以降、特に意外と重要な事実かも知れない。ついでに言えば、ポーランドも 1920 年のポーランド・ソヴィエト戦争で辛くもソ連に勝利を収めたことがある。ピウスツキが軍事的才能を発揮して、赤軍 5 万人を捕虜にし、数日間で 400 キロ近く撤退させた「ヴィスワの奇跡」を知っているという、ニッコリ微笑んでくれる人もいる。



また、中には、日本が、ロシア革命で親を失ったシベリア流刑地のポーランド人孤児 765 名を助けた経緯や(2023 年 9 月 26 日には福田会がポーランドで記念行事を開催した)、杉原千畝がカウナスでポーランド系ユダヤ人を助けた事も知っている人がいる(杉原は、ポーランド政府より、1996 年と 2007 年に二度叙勲されている)。

しかし、ある一定の年代以上のポーランド人にとって大きなことは、やはり 1980 年代における日本のめざましい経済発展の記憶であろう。日本とは、「経済的成功」と同義である。

2023 年 7 月にアウシュビッツ・ビルケナウを訪問したときの事、道ばたで偶然会った 60 代位のポーランド人が、私が日本人だと分かると近づいてきて、アウシュビッツの端にあるルドルフ・ヘスの家まで連れて行ってくれた事があった。ポーランド語がほとんど分からなかった時だったが、ニコニコ顔から繰り出されるトウシバ、ソニー、ヒタチ、コマツ、カワサキ、トヨタなどの固有名詞はすぐに分かった。80 年代には日本のようになりたいと思う国が世界中に生まれたが、ポーランドはその一つである。東欧民主化の先駆けとなったポーランドの民主化運動の母体の一つは著名な「連帯」運動であるが、そのリーダーであったレフ・ワレサ(写真は 2023 年 5 月の市民フォーラムの進行で演説するワレサ)が、80 年のグダニスクでのストライキ時に「ポーランドを第 2 の日本にする」と発言したことは、日本人にも比較的知られている。

もう一つは、やはりアニメや漫画の影響である。サブカルチャーがこの国の「親日熱」、特に若い世代のそれを力強く支えている事を痛感することは度々ある。2023 年 5 月に文化科学宮殿のブックフェアに行った際、(ポーランドではまだまだ活字文化が勢いを持っていることも羨ましいと思った)、長蛇の列が出来ているのはやはり漫画の出展ブースであった。





それとこちらに来て驚いたのは日本食ブームである。ワルシャワに果たしてどれだけ日本食のレストランがあるか分からないが、スーパーで寿司やカップラーメンが普通に売っている。決して安い値段ではないが、それでも売れるのである(写真は近所のスーパーの棚に並ぶ日本食)。アジアンフードフェアも度々開かれ、何度か足を運んだが、12ズロチ(400円)もするオニギリが飛びように売れる。何件かある

ラーメン屋も席がガラガラである時を見た事がない。私の行きつけの床屋では、私が行くといつも東京の食べ物話になるが、特にウッチから来たタデウスは「東京でラーメンを食べるのがオレの夢だ」と毎回言ってきて、好きなラーメンの話でひとしきり盛り上がる。

食だけでもない。数年前、クールジャパンという言葉が流行っていた頃、テレビで誰かが「日本文化の伝播力はアメリカ文化の次ぎ位の伝播力を持つ」と言っていたが、恐らくそうだろう。こちらで沢山の人が入れ墨を入れているのを見るが、漢字が掘られているときは中国語ではなく日本語である事が多い。ウクライナ国境では、ウクライナの女性が足元にキティちゃんの入れ墨をしていたので、それをじっと見ていたら、その美人がニコニコして話しかけてきた事もあった。町行く人のTシャツにもカタカナやひらがなが如何に多い事か(間違っているとち



ょっとかわいそうになる。それでも日本語はカッコいいという感覚なのだろう。写真は7月のワジェンキ公園でのショパンの野外コンサート聞きに来ていた若者たち)。

だが、韓国文化の急激な追い上げにも強く印象づけられる。特に音楽シーンはもはや韓国に二歩も三歩も追い抜かれている。BTSはここでも確かに人気である。韓国は国を挙げて宣伝するのだから叶わない。実は、日本食レストランも、店の名前がイチバン何とかだったり、ペコペコなんかだったりするのに、韓国人が経営している事が少なくない。私が日本人だと分かるとちょっと驚いた顔をされた事もあったが、韓国人の店はそれなりにおいしく値段もそれほど高くない。ポーランド人がやっている店もあるが、寿司屋はまだまだが、ラーメン屋になると彼等の出すラーメンは日本人が考えるラーメンでは全くない。日本人の店もあって、フェスタの出店の時に二つほど入ったが、日本で食べるのと全く同じ味で流石においしいが、値段もそれなりに高級な感じがする。私が借りているフラットの近くに韓国食品のスーパーがあるが、売っている商品の四分の一は日本のもので、こういった所でも日本食は入手でき

るのである。何となくの印象だが、韓国人の店がワルシャワ市民に日本の味を比較的正確に伝えてくれているような気がする。

漫画については、中国勢の追い上げが特に目立っている。前述のブックフェアでは、日本の著名な漫画に並んで、中国人の書いた漫画が並べられていた。絵のクオリティは全く遜色ない。というか、画風が日本のそれに本当によく似ている。客の方でも、これは日本、これは中国と区別して買っているようには全く思えなかった。日本語の集まりの時にある人に聞いたら、中国人が安く日本人に下請けさせて漫画を書かせているのだという。日本の漫画も工夫を凝らし続けないと、その内中国製の漫画にとって変わられてしまうかもしれないが、今のところまだ「本家」が優勢である。

そういえば、アウシュビッツであった例の人のこと。最後に「ちょっと写真を撮ろう」といって彼が差し出したスマホはHUAWEI製であった。それをじっと眺めていた私に彼は何かポーランド語で話しかけた。何故か「あ、このスマホは日本のじゃなくて中国製だけどね」という趣旨の話だと理解した。彼に私のスマホを見せた。日本で使っていたシャープのアクオスだったが、彼はシャープを知らなかった。ポーランドで日本由来のメーカーのスマホを使っている人を見た事はない。

町中の家電屋に行っても、もはや日本製は皆無だ。町中で時々見かける日本のメーカーの古い看板が少し寂しげに見える事がある。筆者は学生時代にバブルを迎えた世代だ。もしかしたらその内それまでなくなってしまうかも知れないと思って気が付けば写真に撮るようにしている。日本に半導体工場を誘致したニュースはこちらでも報道された。80年代とは違った形でのモノづくり大国・日本の復活を祈るばかりである。

2023年10月8日

<参考文献>

Norman Davies, *Heart of Europe: The Past in Poland's Present*, Oxford University Press, 2001

「シベリアからの子供たち」<https://siberianchildren.pl/>. 2023年10月7日アクセス。

「日本・ポーランド関係話題集」平成23年10月、在ポーランド日本大使館。